

子宮がんと HPV について

山口医院

山口 進久 先生

女性性器悪性腫瘍の約95%は、子宮がんと言われていています。これは、女性の悪性腫瘍の約2.4%に当たります。また、最近では子宮がんと HPV(ヒト・パピローマウィルス)との関連が重要視されています。がんの原因には明らかになっていないものが多いのですが、子宮頸がんに関しては、その原因が性交渉で感染する HPV というごくありふれたウィルスであることが解明されました。

最近では性交開始年齢の若年化が進んでいるため、20~30代の女性の発生率が増加しています。HPV に感染しても、多くはその人の免疫力によって HPV が排除され自然治癒することが分かっています。免疫力が弱い体質などでは、数年で進行する場合があります。持続感染すると子宮頸部の細胞に HPV 感染による変化が現れ、その変化を異形成といいます。異形成は、軽度、中等度、高度と時間をかけて進行し、上皮内がんを経て最終的に子宮頸がんになる場合があります。最近の研究で、子宮頸がんの99%は、高リスク型 HPV 持続感染が原因と考えられています。また、HPV は外性器付近の皮膚が直接に接触することで容易に感染するために、80%強の女性が一度は HPV に感染する可能性が大と推定され、その感染者の70~90%は、自信の免疫力で HPV を体外に追い出すと言われていています。一方、10~20年以上で HPV の感染状態(危険性)が続くとも言われています。

以上より HPV 検査を細胞診に併用することで検診の精度が向上し、リスクの把握ができるため、確実にがんの前段階で異常を検出することができるようになりました。このことから、早期発見からがんになる前の段階での予防が可能になります。外国では、ワクチンも実用化され日本での使用も検討されています。